

THE NIKKEI MAGAZINE

Education

日経マガジン 教育特集号
18 January 2019



「意志の翼」をわが子に
中高一貫校・有力塾が育む
自ら考え、自ら踏み出す力

巻頭インタビュー

敷かれたレールを下りて
自分で目指した行き先へ
仲間と共に歩む

NPO法人フローレンス 代表理事 駒崎 弘樹氏

中学受験と子育てを考える



仲間と共に歩む 自分で目指した行き先へ 敷かれたレールを下りて

Special Interview

特集／次代へのメッセージ



NPO法人フローレンス
代表理事

駒崎 弘樹氏

社会課題の解決は
ボランティアではなく
ビジネスでも実現できる

病児保育のためのNPO法人を立ち上げた駒崎弘樹氏は、「社会起業家」の先駆者として活躍しながら、数々の政策提言を行っていることでも知られている。そんな活動の原点とともになっている中・高時代の経験について、お話を伺った。

—駒崎さんは2004年にNPO法人を立ち上げ、日本初の病児保育サービスをスタートさせました。きっかけはどうなごとだつたのでしょうか？

ベビーシッターをしている私の母親から、ある不条理な話を聞いたのがきっかけです。子どもが熱を出したので、その子のママが看病のために会社を休んだのですが、子どもの病気はなかなか良くならず、欠勤が長期に及んだため、結局そのママは解雇されてしまったとか。子どもが熱を出すことも、その母親が看病のために会社を休むことも、ごく当たり前のことで、にもかかわらず、母親が解雇されてしまうのは、どう考えて

も理不尽です。そこで、こんな理不尽を社会からなくすためには、病気の子どもを預かって保育するサービスが必要だと感じました。

—事業主体を企業ではなく、NPO法人にしたのはなぜですか。当時、私は大学生ながらITベンチャーを起業し、年間数千万円の利益を上げていました。しかし、本当にやりたかったのは社会の課題を解決することです。生まれてきた以上、社会的に意味のあることや、誰かの幸運に役立つ仕事がしたかった。それで病児を保育する仕組みを考えたのですが、株式会社にすると、株主の利益を優先せざるを得ず、当初の目的が果たせなくなるかもしれない。そこで目をつけたのがNPOです。当時NPOといえば、「ボランティアで炊き出している人たち」というイメー

THE NIKKEI MAGAZINE
Education
中学受験と子育てを考える
—「意志の翼」をわが子に—

CONTENTS

- 03 卷頭インタビュー
NPO法人フローレンス 代表理事 駒崎弘樹氏
- 06 特別対談／次代のリーダーを目指して
中高時代いかに過ごすべきか
渋谷教育学園 理事長 田村哲夫氏
SAPIX YOZEMI GROUP 共同代表 高宮敏郎氏
- 08 School Report
広尾学園 インターナショナルコース
多摩大学目黒中学校・高等学校
帝京大学中学校・高等学校
- 10 12 2019年度 中学入試の注目すべき動き
森上展安氏

日経マガジン エデュケーション 広告特集
企画・制作＝日本経済新聞社
クロスマedia営業局

デザイン・構成／広真アド
取材・文／cubix、柿崎明子
撮影／坪田彩(帝国写真)、梅澤みゆき

■ 本特集に関するアンケートにお答えいただいた方の中から、抽選で図書カード2,000円分を10名様にプレゼントします。
★詳しくは14ページへ



都心の空き物件を活用し、0~2歳児を対象とした定員19人以下の保育園「おうち保育園」を2010年にスタートさせた



保育の受け入れ先が極度に不足している日本の障害児保育問題を、日本初の「障害児保育園ヘレン」と「障害児訪問保育アニー」という2つの方法で解決

たので、何をするにも日本人代表の高校です。日本人は私しかいなかつて、親を必死に説得しました。留学先はワシントン州の田舎にあります。そこで、自分で留学先を見つけて。それで自分で留学先を見つけて、親を必死に説得しました。

かれたレールから一度下りてみれば、そこなどさ、13歳年上の姉が「敷かれていた」と、海外留学を勧めてくれたのです。すぐに文部省(現・文部科学省)に問い合わせたところ、担当者が親切に、留学のための奨学金観を送つてくれて。それで自分で留学先を見つけて、親を必死に説得しました。

——中高時代の授業で、今でも役に立っているものがありますか。
高校時代、受験対策を受けた小論文ゼミが強く印象に残っています。本を読み、それについて小論文を書き、さらに少人数で徹底的に議論を重ねる。そのサイクルを20回ほど繰り返しました。担当の先生に「これが本当の勉強だ」と言われ、勉強のおもしろさを初めて知りました。「大



駒崎 弘樹 (こまざき ひろき)
Profile

1979年、東京生まれ。慶應義塾大学総合政策学部卒。2004年NPO法人フローレンスを設立し、日本初の「共済型・訪問型」病児保育サービスを首都圏で開始。2010年から待機児童問題の解決のため、空き住戸を使つた「おうち保育園」を開設。また内閣府政策調査員なども務める。1男1女の父で、子ども誕生時にはそれぞれ育休2ヶ月を取得。

失敗のリスクよりも挑戦する姿勢をたたえる社会にしたい

——「社会の課題を解決したい」という思いは、いつ頃から芽生えたのでしょうか。

高校時代ですね。高2の途中から1年間アメリカに留学し、人生が変わりました。出身高校は、中学受験で入学した中高貫校の私立市川高校です。その特進クラスに通っていましたが、クラスメートの話題は予備校や大学受験の話ばかりで、私は違和感があり、漫然と日々を過ごしていました。

そんなとき、13歳年上の姉が「敷かれたレールから一度下りてみれば、そこなどさ、13歳年上の姉が「敷かれていた」と、海外留学を勧めてくれたのです。

すぐに文部省(現・文部科学省)に問い合わせたところ、担当者が親切に、留学のための奨学金観を送つてくれて。それで自分で留学先を見つけて、親を必死に説得しました。

——中高時代の授業で、今でも役に立っているものがありますか。

高校時代、受験対策を受けた小論文ゼミが強く印象に残っています。

本を読み、それについて小論文を書き、さらに少人数で徹底的に議論を重ねる。そのサイクルを20回ほど繰り返しました。担当の先生に「これが

ジしかありませんでしたが、アメリカのNPOサイトを覗いてみると、マーケティングディレクターを配置するなど、実際に事業を運営していました。アメリカではビジネスの手法で社会問題を解決する「ソーシャルビジネス」というものが、すでに確立されていたのです。そこで私も、NPOによるソーシャルビジネスで病児保育に挑戦しようと考えました。

——アメリカ留学で最も心に残っているのはどんなことですか。

アメリカで「いいな」と思ったのは、何かに挑戦したとき、たとえ失敗しても“Nice try! “ Good job!”とほめてくれること。それがとても居心地の良い環境に思えました。他人と違うことをすると、日本では「なに、あいつ」なんて言わますが、アメリカでは「自分とは違うけれど、おもしろいね」と言ってくれる。後者のほうが断然生きやすいですね。日本も多様性を認め合う社会になるべきだし、今は少しづつそうなってきてているのを実感しています。

また、大学時代にベンチャー企業を起こし、現在社会起業家として活動できているのも、あの留学経験があればこそだと考えています。

——これから中学受験をめざす子どもたちへのメッセージをお願いします。

ある経済学者によれば、現在の小

学生の65%は、今は存在しない職業に就くことになるとか。つまり、あるうけれど、おもしろいね」と言ってくれる。後者のほうが断然生きやすいですね。日本も多様性を認め合う社会になるべきだし、今は少しづつそうなってきてているのを実感しています。また、大学時代にベンチャー企業を起こし、現在社会起業家として活動できているのも、あの留学経験があればこそだと考えています。

学生の65%は、今は存在しない職業に就くことになるとか。つまり、あるうけれど、おもしろいね」と言ってくれる。後者のほうが断然生きやすいですね。日本も多様性を認め合う社会になるべきだし、今は少しづつそうなってきているのを実感しています。また、大学時代にベンチャー企業を起こし、現在社会起業家として活動できているのも、あの留学経験があればこそだと考えています。

——中高時代の授業で、今でも役に立っているものがありますか。

高校時代、受験対策を受けた小論文ゼミが強く印象に残っています。本を読み、それについて小論文を書き、さらに少人数で徹底的に議論を重ねる。そのサイクルを20回ほど繰り返しました。担当の先生に「これが本当に勉強だ」と言われ、勉強のおもしろさを初めて知りました。「大

学に行けばもっと勉強できるぞ」と

その先生に乗せられ、私も大学進学をめざすことに。進学先は慶應義塾

大学湘南藤沢キャンパスの総合政策学部。受験では、留学で身につけた英語力が大きな武器になりました。また仲間と議論を重ねる勉強法は、大学進学後も有効でした。

——これから中学受験をめざす

子どもたちへのメッセージをお願いします。

ある経済学者によれば、現在の小

学生の65%は、今は存在しない職業に就くことになるとか。つまり、ある

うけれど、おもしろいね」と言ってく

れる。後者のほうが断然生きやすい

ですね。日本も多様性を認め合う社

会になるべきだし、今は少しづつそ

なってきてているのを実感しています。

また、大学時代にベンチャー企業を

起こし、現在社会起業家として活

動できているのも、あの留学経験があればこそだと考えています。

——中高時代の授業で、今でも

役に立っているものがありますか。

高校時代、受験対策を受けた小

論文ゼミが強く印象に残っています。

本を読み、それについて小論文を書

き、さらに少人数で徹底的に議論を

重ねる。そのサイクルを20回ほど繰

り返しました。担当の先生に「これ

が本当の勉強だ」と言われ、勉強の

おもしろさを初めて知りました。「大

学に行けばもっと勉強できるぞ」と

その先生に乗せられ、私も大学進学をめざすことに。進学先は慶應義塾

大学湘南藤沢キャンパスの総合政

策学部。受験では、留学で身につけ

た英語力が大きな武器になりました。

また仲間と議論を重ねる勉強

法は、大学進学後も有効でした。

——これから中学受験をめざす

子どもたちへのメッセージをお願い

します。

ある経済学者によれば、現在の小

学生の65%は、今は存在しない職業に就くことになるとか。つまり、ある

うけれど、おもしろいね」と言ってく

れる。後者のほうが断然生きやすい

ですね。日本も多様性を認め合う社

会になるべきだし、今は少しづつそ

なってきてているのを実感しています。

また、大学時代にベンチャー企業を

起こし、現在社会起業家として活

動できているのも、あの留学経験があればこそだと考えています。

——中高時代の授業で、今でも

役に立っているものがありますか。

高校時代、受験対策を受けた小

論文ゼミが強く印象に残っています。

本を読み、それについて小論文を書

き、さらに少人数で徹底的に議論を

重ねる。そのサイクルを20回ほど繰

り返しました。担当の先生に「これ

が本当の勉強だ」と言われ、勉強の

おもしろさを初めて知りました。「大

が1983年。どう思って新しく学校を立ち上げたのですか。

高宮

幕張高校を創設されたの大きな課題になっていました。社会学者のエズラ・ウォーゲルが書いた「ジャパン・アズ・ナンバーワン」が世界的な経済発展を果たして、よいよ世界に出ていかなくてはいけないという時代。ところが、国内が安定していたこともあって、逆に国際化に対する及び腰でした。

田村 当時の日本は国際化が大いに進んでいました。社会学者のエズラ・ウォーゲルが書いた「ジャパン・アズ・ナンバーワン」が世界的な経済発展を果たして、よいよ世界に出ていかなくてはいけないという時代。ところが、国内が安定していたこともあって、逆に国際化に対する及び腰でした。

30年で失われた当事者意識「自調自考」を取り戻したい



自己のためには

一生懸命できても

人のためにはそうはいきません

そこに教育の意義があります

開校にあたって教育理念に据えたのは、自らの手で調べ、自らの頭で考える「自調自考」の精神です。国際化のための基本的指針でもあります。

田村 差し当たり「食つていけるからいいだろう」というのが当時の空氣でした。ただわたしはそれでは困ることになると考へています。それが国際化に対応する新しい学校をつくろうと思つたきっかけです。

成には、日本の文化的な伝統が影響しています。国内だけならそれだけで十分かもしれません、海外に出ていくとなれば、頼りになるものは何もありません。全て自分で考えなくてはなりませんから。

高宮 諸外国では当然でも、島国では、そこまでの意識が根付いていなかったのですね。

田村 日本の教育は大学紛争以降、大きく変わりました。それで学生には自分たちがやるんだといふ「当事者意識」が強くありました。しかし、紛争以降は「消費者意識」が強くなってしまい、その影響が中高にも及んでいました。消費者としての立場を主張して、どこかの大学

に入れてくれ、きちんと教えてくれと要求するばかりで、自分たちが何かをするということはない。それが「自調自考」を掲げた最大の理由です。

「自調自考」を実践するために、どこもしていいことをやりました。一つはノーチャイムです。時間を自分で管理させるため、始業・終業のチャイムは鳴らしません。もう一つはシラバスです。授業内容を事前に提示し、解していないわけですね。

世界で活躍できる人材の育成をめざして、渋谷教育学園が設立した幕張中学高等学校、渋谷中学高等学校。ともに「自調自考」を基本理念に掲げ、地球社会に貢献できる力を育てる教育を取り組んでいる。開校時から国際化を教育の柱に据え、海外の大学にも多数の卒業生が進学する同校は、中高時代に何を学ぶべきだと考へているのか。SAPIX YOZEMI GROUPの高宮敏郎共同代表が理事長・校長の田村哲夫先生に聞いた。

日本人の国際化は夜明け前「パブリックセルフ」をはぐくむ教育を

これからリーダーには
人や社会への貢献と
自分の成長のバランスが
求められますね

自己実現と社会貢献意識を
兼ね備えたリーダーに

高宮 本当の意味での自由が理

なげるのですが、基本的人権の最後に残るのは、自分の人生は自分で決まり大きな変化でしようか。

田村 そう思います。最大の理由は国際化に乗り遅れていることです。国際化は簡単ではありません。

田村 そう思います。最大の理由は国際化に乗り遅れていることです。国際化は簡単ではありません。

自分で学んでから授業に臨むよう対応としては、開校当初から帰国生を受け入れました。当時の帰国生教育は、日本の文化からはみ出されることはなかったのですね。

田村 日本の教育は大学紛争以降、大きく変わりました。それまでの学生には自分たちがやるんだといふ「当事者意識」が強くありました。しかし、紛争以降は「消費者意識」が強くなってしまい、その影響が中高にも及んでいました。消費者としての立場を主張して、どこかの大学

渋谷教育学園理事長
渋谷教育学園幕張中学高等学校 校長
渋谷教育学園渋谷中学高等学校 校長

田村 哲夫(哲山) 氏 (たむら てつお)

東京大学法学部卒業。銀行勤務を経て、1962年、渋谷教育学園常任理事に就任。1970年より理事長、1983年に幕張高等学校、1986年に同中学校、1996年に渋谷中学高等学校を設立。公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター理事長、中央教育審議会委員などを歴任。

**国際化の土壤は
国内生・帰国情生が共に耕すもの**

高宮 国際化に関しては、どんな取り組みをされたのですか。

田村 「自調自考」を中心、「倫理感を正しく育てる」「国際人としての資質を養う」という教育目標を定めました。高い倫理感とは、簡単に言えば、人から信頼されること。

これが身についていれば世界中で通用するだろうと考えました。具体的には、自らの手で調べ、自らの頭で考

むこと、つまり自分たちが何を何をするということではない。それが「自調自考」を掲げた最大の理由です。

「自調自考」を実践するために、どこもしていいことをやりました。一つはノーチャイムです。時間を自分で管理させるため、始業・終業のチャイムは鳴らしません。もう一つはシラバスです。授業内容を事前に提示し、解していないわけですね。

田村 教育も変わらないといけません。「自調自考」はそのためのものもあるのです。出来上がるのではなく、成り立つには自由が前提です。これが成り立つには、うした話をしながら、高3では人権の「個人」「セルフ」という意識を持つ人間です。ただし、セルフには「プライベート」と、他者のための「パブリック」があります。生徒には「パブリック」をしっかりと持つてほしいと伝えています。

高宮 先生がいちばん大切にされているのは「パブリックセルフを育む」ということだったのですね。非常に強いメッセージだと思います。

高宮 先生がいちばん大切にされているのは「パブリックセルフを育む」ということだったのですね。非常に強いメッセージだと思います。

田村 教育も変わらないといけません。「自調自考」はそのためのものもあるのです。出来上がるのではなく、成り立つには自由が前提です。これが成り立つには、うした話をしながら、高3では人権の「個人」「セルフ」という意識を持つ人間です。ただし、セルフには「プライベート」と、他者のための「パブリック」があります。生徒には「パブリック」をしっかりと持つてほしいと伝えています。

高宮 先生がいちばん大切にされているのは「パブリックセルフを育む」ということだったのですね。非常に強いメッセージだと思います。

田村 教育も変わらないといけません。「自調自考」は